



標茶町博物館では7月1日から8月31日まで月曜休館日がなくなり、毎日開館します。また、7月17日(土)は、「道みんの日」として常設展示が無料となります。どうぞ来館ください。

今年も行います！縄文土器作り講座

標茶町博物館
塘路湖エコミュージアムセンター
共催事業

縄文時代に使われた本物の土器を見ながら、土器作りに挑戦！
製作後は、野焼きを行い実際に使える器としてお渡しします。

- 日 程／7月3日(土)
- 人 数／10人 (定員になり次第締め切り)
- 参 加 費／350円 (材料費)
- 申し込み／標茶町博物館または塘路湖エコミュージアムセンター
(☎487-3003) まで



標茶町博物館紀要第2号が発行されました

3月31日に「標茶町博物館紀要」の第2号が発行されました。標茶町博物館紀要は標茶町を中心とした北海道東部の自然や歴史に関わる研究論文、報告などを掲載する研究報告誌です。一般に販売などは行っていないが、希望者には博物館ホームページにて無料で配布しています。なお、郷土館時代に発行していた「標茶町郷土館報告」は博物館ホームページにてバックナンバーを確認することができます。こちらも残部がある場合に限り、希望者に配布を行っていますので、興味がある方はぜひ博物館まで問い合わせてください。

※「標茶町博物館紀要」「標茶町郷土館報告」は残部がなくなり次第配布を終了します。ご了承ください。



軍馬補充部川上支部

第17代支部長 山下 彦平 (前編)

標茶近世・近代人物誌 第6話

標茶に生きた人々の中には、伝記のような形で記録され、歴史にその名を残した方がいます。そんな人々の人生の物語をご紹介します。今回は標茶の軍馬補充部川上支部長として勤務し、その後日本軍最後の騎兵隊長として戦った山下彦平をご紹介します。

山下彦平は、1892年(明治25年)12月20日に徳島で生まれ、陸軍士官学校に入学しました。当時の陸軍士官学校は16歳から入学でき、旧制中学4年修業(現在の高校卒業程度)に相当する学力が必要とされていました(学歴は必要なし)。学費免除ということもあって競争率の高い難関校であり、この学校に入ること自体が大変なことでした。陸軍士官学校はその名の通り、各兵科の将校となる人材を育成する学校です。兵科には「歩兵」「騎兵」「砲兵」「工兵」「輜重兵」などいくつかありましたが、山下は騎兵科で1914年(大正3年)5月28日に卒業。なお同期卒の軍人では、硫黄島の戦いで戦死した陸軍大将の栗林忠道が知られています。

山下は士官学校卒業後、騎兵将校として経験を積んだと思われますが詳細は不明です。1941年(昭和16年)3月1日、軍馬補充部川上支部長として標茶に赴任。階級は大佐で年齢は51歳でした。山下が赴任したこの時期、日中戦争が拡大・激化する中、戦地への軍馬調達が急務となっており、着任早々難しい局面を迎えていました。

従来の軍馬補充部では若い馬を一般市場より高値で購入し、数年の育成を経て師団などへ供給していましたが、戦時下のために馬の一般市場価格が軍馬補充部の買い上げ価格より高騰し、購買に支障が出ていました。この傾向は1938年ごろより進み、1940年には、軍馬補充部での購買価格が1頭平均約4000円のところ、一般の馬1頭の購買価格は5000円を超えていました。古からの聞き取りや記録では、元々の一般購買価格は1頭5000円100円くらいだったと語られており、価格が高騰していたことがうかがえます。こうした物資の不足や高騰は人々の暮らし全体に及んでおり、重要物資の配給が1938年より開始。翌年「価格統制令」が公布されています。これは国家総動員法に基づき、物資の価格上限を国が定める勅令です。馬も1941年6月より、最高販売価格が国によって定められました。このことにより一般



No.1 オオルリボシヤンマ

オオルリボシヤンマは6月下旬から9月下旬ごろまで見られる大型のヤンマです。ルリボシヤンマ属のトンボはほかにもいます。標茶町では本種のほかに「ルリボシヤンマ」と「イイジマルリボシヤンマ」が確認されています。標茶町で見られる3種は見た目がとてもよく似ていますが、胸やおなかの模様の違いをじっくり見ると見分けることができます。

【参考文献】尾園暁ほか「日本のトンボ」(2012) 文一総合出版、石田昇三ほか「日本産トンボ幼虫・成虫検索図説」(1988) 東海大学出版会

いきもの発見日和



File.9 メジロ

発見日 5月



短い桜の季節に、花と花との間を飛び回るメジロを見つけました。メジロはスズメほどの大きさで小型の鳥ですが、黄緑色のカラーと目の周りの白いラインが大変目立つ野鳥です。標茶町では夏鳥として春から夏の間に見ることができます。メジロは虫や木の実を食べるほかに、花の蜜を吸う「吸蜜」をします。この日も桜の花の蜜を吸っていたのかもしれません。

【参考文献】河合大輔ほか編「北海道野鳥図鑑」(2004) 亜細亜社

電話室の展示室「旧五十石橋の橋名板」

近年寄贈された資料を抜き出して展示する電話室の展示室。

今月は、旧五十石橋の橋名板を展示します。現在の五十石橋は平成29年より使われていますが、昭和43年に架橋され解体撤去された旧五十石橋の橋名板です。7月31日(土)までの展示です。



的な馬の購買価格が、2歳馬は3000円、3歳馬は4000円を上限としたことが、標茶町町史編さん事務局所蔵の馬産資料に示されていますが、当時は反発もあったようです。なお軍馬補充部を含む国の機関は、この価格統制の範囲外であり軍馬資源確保に有利な制度でした。

そして戦地へ送る軍馬の数を増加させるため、若い馬の育成と並行して、成長した馬を購入し、直接戦地へ送る方法も取られ始めました。その1つの方法が「沿線購買」です。沿線購買とは、鉄道で北海道内を回りながらそれぞれの地域で馬を買い、購入した馬を貨物列車に乗せて輸送する方法です。購入した馬は本来、師団や連隊に輸送し調教が行われますが、1941年ごろには本州まで馬を輸送し、大陸の戦地へ直接輸送していました。川上支部に勤務していた方の話でも、購入した馬を広島島の宇品港まで輸送した話や、満州(現在の中国東北部)まで運んだ話が残されています。

山下が着任した当時の川上支部はこうした状況の中にあり、その手腕を発揮したのでしょうか。1941年(昭和16年)12月8日の陸軍によるイギリス領マレー半島への上陸作戦、海軍によるハワイ諸島真珠湾攻撃に続き、太平洋戦争へと拡大していきます。そして山下の運命も大きく変わっていききました。

参考文献

・福川秀樹「日本陸軍将官辞典」芙蓉書房(2001) p.761、永井秀夫「第八章 戦時下の軍馬補充部」『標茶町史通史編』第2巻 標茶町 ぎょうせ pp.613～655、寺島敏治「第5講座『標茶の歴史』(4) 軍馬補充部川上支部と標茶」釧路短期大学生涯教育センター・標茶町教育委員会(1993) pp.8～21、坪岡始「軍馬補充部川上支部と標茶」その①『標茶町郷土館講座』第18号(2006) 標茶町郷土館 pp.15～48、坪岡始「軍馬補充部川上支部と標茶」その②『標茶町郷土館講座』第19号(2007) 標茶町郷土館 pp.17～41、『標茶町郷土館報告』第19号(2007) 標茶町郷土館 pp.17～41、新人物往来社戦史室編「日本陸軍指揮官総覧」(1995) 新人物往来社 pp.120～122「陸軍士官学校(日本)」フリー百科事典『ウィキペディア』(wikipedia) (2021/05/14 06:09 UTC版)



軍馬入部風景
(軍馬補充部へ購入した馬を連れて行く際に撮影されたと伝えられる)